



TITLE:

米價と關稅との關係に就て(上)

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 米價と關稅との關係に就て(上). 經濟論叢 1925, 20(6): 943-962

ISSUE DATE:

1925-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128291>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第十二卷 第六號

大正十四年六月一日發行

論叢

米價と關稅との關係に就て……………法學博士 河田 嗣郎
 勞働者所得に對する特別課稅……………法學博士 神戶 正雄
 天保以後の西陣……………經濟學博士 本庄榮治郎

說苑

運賃延戾制……………法學士 小島昌太郎
 獨逸古典學派の勞賃論……………法學士 山口正太郎
 マルクスの絶對地代に就て……………經濟學士 八木芳之助
アダム・スミスに於ける 勞働價值法則の妥當性に就……………經濟學士 森 耕二郎

雜錄

資本主義經濟組織の下に於ける商業の一機能に就……………經濟學士 谷口 吉彦
 統計拾穗抄……………法學博士 財部 靜治

法令

衆議院議員選舉法摘要・貴族院令ノ改正・治安維持法・關東州ニ行ハルル命令ニ依ル日本船舶ニ
 關スル件・船舶無線電話施設法・漁業財團抵當法・倫敦協定ニ依リ實施セラルルコトニ決定シタ
 ル専門家計畫(所謂ドーズ案概要)

附錄

本誌第二十卷總目錄

經濟論叢

第二十卷 第六號

(通卷第百貳拾號)

大正十四年六月發行

論叢

米價と關稅との關係に就て

(上)

河田 嗣 郎

一 序 言

穀物輸入關稅が國內市場に於ける穀物の價格に及ぼす影響に就いては、私は曾て、『穀價構成上ニ於ケル關稅ノ作用』といふ論文に依て理論と實狀とを明かにして置いた。そして我國の米價に對する米穀輸入關稅の影響に就いても、色々の方面から實狀を叩いて數字的に之を實證して置いた。¹⁾然しそれは大正六年のことであつて、數字材料の如きも大正三年までしか用ゐることが出来なかつたのだから、爾來約十年を經過したる今日としては、其後の實狀に照して、前論の補足

1) 拙著『穀價ノ研究』

や訂正を爲す必要も感ぜられるし、兎に角更に研究を要するものがある。仍て茲にまた新たな資料に據て米價に對する關稅の作用を討究してゐることゝした。

然るにこの研究を試むるに就いて、先づ注意すべきことは、前論文中にも之を明かにして置いたやうに、わが國の常食料たる米穀の中に在つて、内地產のものと外國より輸入されたものとの間には、著しき品質の相違あり、歐洲諸國に在つて國產の小麥と外國產の小麥と品質の相違する以上にその相違の程度の大なることこれである。之が爲めに歐洲に在つては國產の麥と輸入されたる麥とは、互によく代替するを得るに反して、我國に在つては、輸入米は内地產米に比して其の品質風味の著しく下等なる爲めに、到底よく充分に内地產米に代替するを得ず、たゞ國民中の最も所得少き階級の間に於て消費せらるゝに過ぎず、然かも多くの場合に於ては内地產米の補充として、之と混合されて用ゐらるゝに過ぎぬ。其の價格に就いて見るも、内地米に比すれば外國米は遙かに下位に在る。即ち市場に在つては、兩者は同一商品中に於ける品質の異なるものたるには相違なきも、其の實狀には何となく異種商品たるが如き觀なきにあらざるほどである。食料としては内地米に對する代用食料たるが如き觀を呈して居る。

内地產米に對する斯かる品質上と價格上との懸隔は、従前は朝鮮よりの移入米にも存して居たのだが、近時朝鮮に於ける米作の改良特に優良種の奨励、調製方法の改善が有效に行はれて大い

に成績の見るべきものがあるが爲めに、朝鮮米は段々と内地米に接近して兩者間の品質及價格上の相違は、外國輸入米に於けると比較してよほど少きに至つた。臺灣よりの移入米も多少づゝ改良されて居るが、之はまだ朝鮮米ほどにはなり得ない。内地米に對しては恰も朝鮮米と外國米との中間に在る有様である。

兎に角米穀輸入關稅が内地市場に於ける米價に及ぼす影響を論究するに就いては、右の如く輸入さるゝ米穀が内地産米に對して殆んど商品として別種のものとも見得られないでもないほどに品質の劣つて居るといふ事情は、甚だ重要な意義を有せざるを得ない。之が爲めに、輸入關稅の影響は之を輸入されたる外國産米の市價の上に於て檢せなければならぬと同時に、また之を内地産米市價の上に於ても見定めざるべからず、然かもその影響は兩者に對して必ずしも同一様ならず、寧ろ大いに相違するを見ることの豫め想像せらるべきものがある。少くとも獨逸などに於ける穀物輸入關稅が内地穀價の上に及ぼす影響とは、頗る趣の異なるものあるべきを思はしむるに足るものがある。

二 米穀の供給狀態

先づ内地市場に於ける米穀の供給狀態を内地産米と外國産米との比較に就いて窺ふことゝす

る。内地市場に供給さるゝ内地米は勿論その國內生産量の全部ではなく、その一部分は直接に生産者たる農民の自家消費に充てらるゝから、市場に供給として表はるゝ所のものは、此の部分を引去つたものでなければならぬ。然し斯かる意味に於て市場に對する内地産米の供給量を知ることは、其の數字的材料の備はつて居らぬため正確には行はれ難ければ、茲には内地生産量と外國よりの輸入量とを比較して示すこととする。尤も農民といへども外國米を消費する者もかなり多いのだから、内地生産量と外國よりの輸入量とを突合せて比較したからとて、之を廣い意味の市場關係として見れば、供給上の比較として甚しく不倫となるわけではない。

試に大正十二年より遡つて既往十五ヶ年間の比較を示せば左表の通りである。²⁾(單位石)

	内地生産量	朝鮮より移入量	外國より輸入量
明治四十二年	五二、四三七、六六二	—	一、三二五、二四三
同 四十三年	四六、六三三、三七六	二四一、九三七	九一八、六二七
同 四十四年	五一、七一、四三三	二四九、九三七	一、七一九、五六六
大正元年	五〇、二二二、三九四	二五九、〇五五	二、二三四、四三七
同 二年	五〇、二五九、三七九	五七三、九〇〇	三、六三七、二六九
同 三年	五七、〇〇七、五一	一、〇四〇、九三二	二、〇二二、六四四
同 四年	五五、九二四、〇七八	二、〇二六、四六五	四五七、六〇六
同 五年	五八、四五二、四三五	一、一六八、五七〇	三〇九、一五八

2) 食糧局調査資料第五號、第二次米穀統計(日本之部)大正十三年十一月刊行、2頁以下、9頁以下、11頁以下

同 六 年	五四、五六六、二二七	一、一二九、五二八	五六四、三七六
同 七 年	五四、七〇二、一〇二	一、八七九、〇一一	六四七、一六八
同 八 年	六〇、八一八、六八八	二、七五七、二〇七	六四二、三八二
同 九 年	六三、二〇八、五四二	一、八九三、七三二	四七一、〇八三
同 十 年	五五、一八〇、五三九	三、二〇六、五八四	一、五九五、三七八
同 十 一 年	六〇、六九三、八五〇	二、九六〇、七三二	三、〇四三、九一二
同 十 二 年	五五、四四三、〇八九	三、八七五、二二三	一、七六九、五五四

右表に照して之を見れば、我國に在つては、内地産米の量に對して外國より輸入さるゝ米穀の數量は洵に僅少である。其の最も多く輸入されたる年に在つても、内地生産量に對して僅かに七分強（七・二四％）に過ぎず、普通は一分内外であり、最も少き年には僅々五厘強（〇・五三％）である。朝鮮よりの移入米に至つては常に大抵輸入外國米に比し倍額以上の量を示して居るが、それでも内地産米量に比較すれば、一割に及ぶことはなく、近年大いに其量の増加を見たりと雖も尙ほ最も多き年でも七分弱にしか當つて居らぬ。最も少き年には五厘強にしか及ばなかつた。

以て如何に我國に在つては外國よりの米穀輸入は國內生産が供給量として不足する場合に於ける補充としての意呼だけしか有せぬかを知ることが出来る。そして朝鮮よりの移入米も將來はいざ知らず現在までの所では、やはり補充たるだけの意味しか有せぬ。内地産米と共通に自由に賣

買せられて、消費上の選擇もたゞ嗜好に従つて行はれる状態を見るまでには、なほ多くの年月を要するであらう。

然るに尙ほ致ふべきことは、外國產米はその品質の著しく劣れる爲めに、内地產米に對する補充として需要さるゝにしても、其の需要は主として所得少き階級の間より表はるゝものたる結果、その輸入の行はるゝ量の大小は、内地市場に於ける米價の高低と密接な關係を有して居る。即ち米價高き時期に當つては、其の輸入量多く、米價安き時に少い。之れ言ふ迄もなく下層階級の人々が、米價高き折には、止むを得ずして不味を忍むで安き外國米を消費せざるを得ざる必要に迫らるゝが、米價安き時期には直ちにその消費を捨てゝ、美味なる内地米の消費に移る所かなり著大なるが爲めたるに外ならぬ。

試に左に米價と外米輸入量との比較を表にして示してみやう。³⁾

	主要市場平均内地 米(中米)卸相場	外米輸入量
明治四十二年	一二・五四 ^円	一、三二五、二四三 ^石
同 四十三年	一二・九三	九一八、六二七
同 四十四年	一六・八五	一、七一五、五六六
大正元 年	二〇・三七	二、二三四、四三七

3) 同書29頁及9頁

同 二 年	二一・〇一	三、六三七、二六九
同 三 年	一五・四六	二、〇二二、六四四
同 四 年	一二・四七	四五七、六〇六
同 五 年	一三・二六	三〇九、一五八
同 六 年	一九・三五	五六四、三七六
同 七 年	三一・八二	四、六四七、一六八
同 八 年	四五・四九	四、六四二、三八二
同 九 年	四三・六五	四七一、〇八三
同 十 年	三〇・三五	一、五九五、三七八
同 十 一 年	三四・四五	三、〇四三、九一二
同 十 二 年	三一・六四	一、七六九、五五四

即ち右表の示す所によれば、明治四十二年と其翌年とは米價が比較的に安かつたものだから（四十一年は拾五圓貳拾八錢）外米の輸入量も少く、次に明治四十四年、大正一、二年と米價の稍々騰貴した際には輸入量は大いに増加し、其後大正三、四、五、六年と米價の著しく下落した折には輸入量も從て著減し、次で七、八年と米價の奔騰を見た時期に當つては輸入量は頗る巨額に及むだ。其後米價の下落と共に輸入量も減少したが、たゞ大正十一年には朝鮮よりの移入比較的小なかつた爲めに、外米の輸入は相當多量に上つたやうな有様である。ともかく之に依て明かな

る如く、内地市場の米價の高低と輸入米量の減増とは、影の形に従ふが如く相呼應して動いて居る。其間の關係の密接なるは、内地生産量と輸入量との間の關係の比ではない。生産量との比較に於ては前々表の之を示すが如く、内地の生産量は少きに輸入量も比較的少量たるに過ぎざる年もあれば、(例へば明治四十三年の如き、大正四年、六年及十年の如き)内地生産量豊富なるに拘らず多量の輸入の行はれたる年もあり、(例へば明治四十四年、大正八年及十一年の如き)とかく兩者間の關係は步調が揃ひ兼ねて居る。

して見れば輸入米量の多きと少きとは内地の作柄の豊凶に依て左右さるゝ所よりも、内地米價の高低に依て左右さるゝ所の方が強いといふことが實證さるゝわけで、米價高き場合には内地米消費の限界にある所謂限界消費者が移りて安價なる外米を消費するに至り、米價安き場合には外米消費者としての最上限界に在る人々が移りて内地米の消費を多くするに至るといふ事實は、否定し難き所である。されば我國に於ける外米はやゝ代用的な食料として、國民主食料として補充的な意義しか有たぬと論斷して不可なしとせねばならぬ。若し外米が内地米と自由に代替し得るもので、兩者消費上の區別はたゞ趣味嗜好に依つて定まるに過ぎざるものであるならば、市價の高低に依て其の輸入量の斯くも直接に影響せらるゝことはない筈である。

すべて此等の點に就いては、私が前の論文に於て取扱つた數字材料もよく之を立證するに足り

たが、今また新たな資料に照し見るも、論據は益々確實にせらるゝのみで、毫も之を動かすに足るものがない。

三 内外國產米價比較

次に内地米と外國米とは、若し兩者間の消費上の代替が自由に行はれ、國民中のかなり多大なる部分の人々が、時の事情に依り兩者何れにでも消費を替へるものであるならば、兩者價格の差額は、米價一般に高き折には比較的少くなり、米價一般に低き折には比較的多くなるべき筈である。即ち前論文にも之を論示したやうに、米價高き際には、人々は高價なる内地米を消費し得ないで外國米に移り之を消費することゝなる結果として、内地米に對する需要減少して其の價格を多少引下ぐる働を爲すと同時に、外國米に對する需要増加して其の價格を多少引上ぐる働を爲し、兩相場の間存する差額（値開）は減少せしめらるゝことゝならざるを得ない。然るに米價一般に安き時期に當つては、外國米を消費する者の中の少からざる部分の人々が移つて内地米を消費することゝなるが爲めに、外國米の需要は減じて一層その價格を引下ぐることゝなり、内地米の需要は増加して其の市價を引上ぐる働が多少そこに表はれて來て、兩者間の價格の差額は大とならざるを得ないからである。

斯かる比價の變動が、實際上に於て果して原則通りに、内地米と外國米との間に存して居るか。前論文に於て取扱つた材料の示す所では、少しもかゝる現象の認むべきなく、却つて反對に、米價一般に高き際に於て内外米價の開は大であり、米價安き時期に當つて値開は小であつた。然しそれは明治三十六年より大正三年に至る間の内外米價の比較に於て認めらるゝ所であつたが、其の以後の相場に照しても、やはり同様の狀態が窺はれるか。試に數字に當つてみよう。

先づ神戸市場に於ける内地白米相場と關貢白米、西貢白米、暹羅白米、東京^{トシヤ}白米相場とを、大正二年より十二年に至る十一年間に涉つて比較して示せば、左表の通りである。⁶⁾

	内地白米 (中米)相場	關貢白米 (特等米)相場	西貢白米 (一)等米相場	暹羅白米 (二)等米相場	東京白米 (一)等米相場
大正二年	二五・九〇	一六・三〇	一五・五二	一七・六〇	一五・五〇
同 三年	一九・七〇	一三・五七	一三・三五	一五・四五	一一・二七
同 四年	一六・四〇	一二・九七	一二・六七	一四・三六	一二・〇五
同 五年	一七・四〇	一四・五〇	一三・八三	一六・〇七	一三・五七
同 六年	二三・九四	一八・三五	一七・九〇	二〇・二八	一七・八八
同 七年	三七・九四	二二・四五	二二・四〇	二二・〇八	二一・八八
同 八年	五二・〇〇	三二・六七	三六・四五	三八・六九	三四・七一
同 九年	五三・六〇	1	三七・九一	四三・五九	三五・六六

5) 『穀價ノ研究』七一頁以下

6) 第二次米穀統計40頁43頁

同	十	年	三・八・三一	二・二・八七	二〇・二二	二二・五〇	二〇・五三
同	十一	年	四四・九四	一一・八三	一七・二九	一八・九〇	一
同	十二	年	四一・二一	一九・三九	一八・九五	二〇・六〇	一

右表に照して之を見れば、内地産米の相場騰貴した年には外國産米の相場も夫々皆騰貴して居る。固よりその騰貴の程度は、産地の異なるに依て多少づゝ相違して居るが、騰貴の事實は外國産米皆一様に表はれて居る。又内地産米價の下落した年には外國産米價も皆下落して居る。此の事實に依て觀れば、内地産米價の高い折には、之を消費する人々の中幾干かの者が外國米の消費に移る結果その需要を増して、外國米の相場をも騰貴せしむるものたるを知り得ると同時に、内地産米價の安い時には、外國米の消費が幾分内地米に移る結果外國米に對する需要減じその相場を下落せしむるを知ることが出来る。從て内地米と外國産米との間には、多少消費移轉の行はるゝことは、否定し難い所である。

けれども其の消費移轉の行はるゝ程度のあまり強大ならず、人口にして見ればたゞ國民中の下層に位する一小部分の者のみが、その消費移轉を爲すに過ぎず、その消費移轉の爲めに外國米相場の騰貴を促す場合には大いに之を騰貴せしめて、内地米相場に接近せしめ、又反對に外國米相場下落を促す際には大いに下落せしめて内地米相場との隔を大ならしむるに足るほどに分量の

多大なる消費移轉の行はるゝものにあらざること、右表に依て窺ひ知り得らるゝ。即ち外米相場は騰貴するはするにしても内地米の騰貴の勢に及ばず、下落する際にも又内地米相場下落の程度に及ばない。到底よく十分に消費移轉の爲めに内地米相場の騰貴を抑へて外國米相場との間隔を小ならしむるには足らず、又よく十分に内地米相場下落を支へて外國米相場との開を大ならしむるに足らない。つまりその働を爲すに足るほど多大なる消費移轉は行はれないことが、窺ひ得らるゝ。

斯くて即ち外國米は内地米に對してはたゞ僅かにその補充的消費財たる地位しか有つて居なくて、その消費の増すも減するも、内地米相場に應じて比較的少量たるに過ぎざるを知り得るのである。その消費の移轉する分量は、之を内地産米の消費額に比較すれば、その僅少部分たるに過ぎず、到底よく内地米相場を調節するに足るほどのものでない。

此の事情を更に明確にする爲めに、内地米相場と之に對する各產地外國米の相場の差額(値開)とを、右表より作製して示すことにする。

同 三 年	大 正 二 年	内地白米	蘭貢白米	西貢白米	暹羅白米	東京白米
		(中米)相場	(特等米)値開	一等米(値開)	(二等米)値開	(二等米)値開
		二五・九〇	九・六〇	一〇・三八	八・三〇	一〇・四〇
		一九・七〇	二・一三	六・三五	四・二五	八・四三

同	四	年	一六・四〇	三・四三	三・七三	二・〇四	四・三五
同	五	年	一七・四〇	二・九〇	三・五七	一・三三	三・八一
同	六	年	二三・九四	五・五九	六・〇四	三・六六	六・〇六
同	七	年	三七・九四	一五・四九	一五・五四	一五・八六	一六・〇六
同	八	年	五二・〇〇	一九・三三	一五・五五	一三・三一	一六・二九
同	九	年	五三・六〇	—	一五・六九	一〇・〇一	一七・九四
同	十	年	三八・三一	一五・四四	一八・〇九	一四・八一	一七・六八
同	十一	年	四四・九四	三三・一一	二七・八三	二六・〇四	—
同	十二	年	四一・二一	二一・八二	二二・二六	二〇・六一	—

即ち右表の示す所では、大正二年のやうな比較的米價の高かつた年には内地米相場に對する外國米相場の開は却つて大であり、大正三、四、五年と比較的米價の安かつた時には値開は小となり、大正六、七、八、九年と米價の暴騰した年には値開は頗る大であつた。たゞ大正十、十一、十二年に在つては、米價のやゝ下落せるに拘らず、値開は減少せないで却つて大となりたるを見ただけである。

惟ふに大正二年以來大正九年に至るまで、値開の關係が、先に示した原則通りにならないで、却つて其の反對の狀況を呈して居るのは、正に外國米が内地米に對する代用食料としてたゞ僅かに補充的な關係しか有ち得ざる事實を立證するものでなくてはならぬ。兩者間に自由なる消費上

の代替作用の働くものでない。然るに大正十年より十二年に至る三ヶ年間に於て内地米價や、下落せるに拘らず、更に外國米相場も大いに下落して、兩者間の開を大ならしめたのは、大正七八、九年とあまり甚しく内地米價の騰貴したるに鑑み、時情を緩和する爲めに盛に外國米の輸入が行はれ、その供給量を頗る多量ならしめたるに因るものでなくてはならぬ。それは前に第一表に示した外國米輸入量の比年比較について見ても明かなる所である。即ち大正十、十一、十二年に在つては、外國米に對する需要の減少に依て其の相場を安からしめたばかりでなく、其の供給のやゝ過剰なるほど増加されたる爲めに、相場をして愈々低安ならしめた次第である。相場下落の二原因中前者よりも後者の方が一層有力だつたのである。從て此の三年間に於ける値開の大なるは、急に外國米が内地米に對する代替性を増したが爲めでもなければ、又此の値開の大といふ事實あるに依て、外國米の内地米に對する代替性の十分なるを立證するに足るわけでもない。

要するに上に示す色々の論證から之を見て、内地産米と外國よりの輸入米とは、其の品質、價格、消費分量等の著しく相違するものであり、商品としては稍々別種の商品たる實狀を有し、特に價格變動の狀況に於て同一種商品としての完全なる代替性を立證し難いものであるが故に、輸入關稅が米價に對して及ばず影響を攷究するに就いては、内國米と外國米とを別々に取扱ひ、その各々に對する影響の有無程度等を見究むる必要がある。歐洲の國々に於けるが如く、内外産穀

物を同一種商品として其の一樣なる價格に對する關稅の働を一樣に探究するを得難きものとせなければならぬ。

尙ほ參考の爲め朝鮮及び臺灣より移入さるゝ米穀と内地產米とを比較して見るに、朝鮮米の如きは前にも之を一言したやうに、近時大いに其の改良の行はれたる結果、品質はよほど内地米に近よつて來た。從て兩者間に於ける消費上の代替的移轉は外國米に比すれば遙かに自由に行はれるものとなつた。然しそれでも我が消費者一般の間には、昔時朝鮮米の品質の著しく劣つて居た時分の考が、依然として因習的に残つて居て、今でも朝鮮米は外國米同様に劣等なものと考え、劣等米の別名を朝鮮米と稱するほどである。

けれども實際近年に至つては朝鮮米は品質よほど好良のものとなつて來たから、米穀商人の間では、朝鮮米中の上等なるものは、之を朝鮮米として賣るよりも、適當に内地產の米の中に混合して販賣するを以て多數の例とするに至つた。斯くて今や上等なる朝鮮米は内地米に對してはや、同一商品たる性質を有するに至り、其の價格の開きも外國米の値開に比すれば遙かに小なるものとなつた。併し一般的に之をいへば、現在に於てもまだ朝鮮米は内地米の補充たる地位を脱し得ないで、内地米と外國米との中間に居り、その價格も亦中位に在る。特に朝鮮米中の以下

品質のものに至つては、その内地米に對する關係は、外國米と餘り著しき相違はない。即ち内地米と同一商品たるを得ないで、その代用品たる性資を脱し得ないで居る。

試に大阪市場に於ける内地玄米(攝津中米)と朝鮮玄米(釜山三等米)との卸賣價格の比較を示してみ^{〇七)}る。

		内地玄米		朝鮮玄米		兩者の 値開
		(攝津中米)相場	四	(釜山三等米)相場	四	
明治	三十七年	一三・三二		一一・七五		一・五七
同	三十八年	一二・四八		一〇・七八		一・七〇
同	三十九年	一四・〇八		一二・一五		一・九三
同	四十年	一五・四三		一三・五一		一・九二
同	四十一年	一五・二六		一二・八四		二・四二
同	四十二年	一二・五〇		一〇・七六		一・七六
同	四十三年	一二・六九		一一・〇五		一・六四
同	四十四年	一七・四七		一四・九六		二・五一
大正	元年	二〇・五七		一七・〇六		三・五一
同	二年	二一・五四		一八・一七		三・三七
同	三年	一五・八二		一二・九六		二・八六
同	四年	一二・九〇		一〇・〇六		二・八四
同	五年	一三・九一		一一・七二		二・一九
同	六年	一九・一六		一七・六七		一・四九
同	七年	二八・八四		三〇・九〇		二・〇六

同 八 年	四六・二三	四二・三八	三・八四
同 九 年	四五・七〇	四〇・五二	五・一八
同 十 年	三一・二一	二六・八七	四・三四
同 十 一 年	三六・五九	三一・六四	四・九五
同 十 二 年	三二・九一	二九・三六	三・五五

右表を見れば、前に内地米相場と外國米相場との比較を示した表と殆んど其趣の異なる所がない。即ち内地米價の高い年（明治三十九年より四十一年、明治四十四年より大正二年、大正六年より九年）には朝鮮米も高く、内地米相場の安い年（明治三十七、八年、四十二、三年、大正三年より五年、十年より十二年）には朝鮮米相場も低い。そして兩者の値開に於ても、相場の高い時期に値開大で、相場の低い時期に値開小である。尙又大正十年より十二年に至る時期に在つては、内地米價はやゝ下落せしに拘らず、値開のかなり大だつたことも外國米の場合に於けると似て居る。たゞ併し乍ら、朝鮮米に在つては外國米に於けると異り、大正七、八年に於て内地米に對する値開比較的小だつたことを注意せなければならぬ。特に大正七年に在つては、朝鮮米相場の方が却つて内地米相場よりも貳圓餘り高かつたのである。之は如何なる理由によるかといへば、大正七、八年の米價暴騰の時期には内地米より朝鮮米に對する消費の移轉がかなり多量に行はれたることが、その理由を爲すものと見る外はない。特に大正七年米騒動の演ぜられたる際に

は、無闇に朝鮮米の買付行はれ、其の移入巨額に上ばり(第一表參照)、然かもその價格は随分高く、内地米相場以上に出るといふ異常な景況を呈した。然し斯かる異狀の呈せらるゝを得たるは、全く近年朝鮮米の品質改良が行はれ、内地米との間に消費移轉の自由に行はれ得る素地の造り出されたるに依るものとせなければならぬ。

然し斯く朝鮮米が内地米に對して品質に於て接近し、價格に於ても動もすれば壘を摩せんとするに至りたるは、たゞ此の近年のことたるに過ぎないで、以前は大體外國米より少し良い位のものたるに過ぎず、外國米扱されたる爲めに、その内地米に對する相場比較の狀況も、右表に之を示す所の如くなる外はなかつた。

次に臺灣米だが、之は其の品位や價格の上からいへば、殆んど多く外國米と選ぶ所なく、同じく移入米ながら今や朝鮮米には及び得ないやうになつて來た。試に東京市場に於ける玄米卸賣價格について内地米と臺灣米(臺中米)との比較を示してみやう。

	内地米 (標準中米)相場	臺灣米 (臺中米)相場	兩者の 値開
明治四十一年	一五・九四 ^円	一〇・八〇 ^円	五・一四 ^円
同 四十二年	一三・一四	九・四八	三・六六
同 四十三年	一三・二七	一〇・四〇	二・八七
同 四十四年	一七・三五	一二・六三	四・七二

大正元	年	二〇・九六	一六・三四	四・六二
同	二	二一・三三	一五・一七	六・一六
同	三	一六・一二	一一・七一	四・四二
同	四	一三・〇七	一〇・三三	二・七四
同	五	一三・七六	一〇・七三	三・〇三
同	六	一九・八四	一五・八三	四・〇一
同	七	三二・七五	二七・三四	五・四一
同	八	四五・九九	三七・二一	八・七八
同	九	四四・六三	二九・九〇	一四・七三
同	十	三〇・七五	一八・七六	一一・九九
同	十一	三五・一四		
同	十二	三二・六二		

即ち臺灣米も亦内地米價の高貴なる時期には相場騰貴し、内地米の安き折には相場低く、相伴つて騰落して居る有様は、外國米に於けると異なる所がない。そして又相場高き時期には内地米に對する値開大であつて、相場低き時期には値開小である。然し之を外國米に於ける場合と比較すれば、相場の安い場合(大正三年より五年)に於ける値開は、外國米の方が概して小さくて、臺灣米の方が概して大なるに反して、相場の高い時期に在つては(大正六年より九年)外國米の値開の方が概して大で臺灣米の値開の方が概して小さかつた。此の現象は先に示したる原則に照して攷ふれば、相場の高い場合に内地米の消費が多少減じて他の安價米の消費に移り行く際に、臺灣米に

移る方が移り易く、從て其の需要を増して、臺灣米の相場を幾分か外國米よりもより多く騰貴せしめることゝ、相場の安い時期には消費が内地米の消費の方に移り歸つて來ることゝを示すに足るものとせなければならぬ。そして此の現象の表はれて居る所から見ても、外國米に比すれば臺灣米の方が内地米に對する補充的代用食料としては、やゝ自由に消費移轉の行はるゝ意味に於て優れたる地位に在るものと見る外はない。尤も數字に表はれた所は比較の年數が短いから十分確實には言い難いが、それでも大正七、八、九年の米價暴騰期に於ける内地米相場に對する値開について見れば、臺灣米の値開は外國米に比し遙かに少なかつた。此事は當時朝鮮米の値開の特に小さかつたことゝ併せ見るべきであつて、朝鮮米、臺灣米及び外國米の内地米に對する代替作用の大小強弱は大體之に依つて窺ふことが出来る。然し乍ら移入は輸入よりも障礙少く自由に行はれ易き事情あることが、此の關係に就ても多少の意味を有し、價格の上にも多少の影響を及ぼすべきは注意せねばならぬ所であらう。たゞ之を數字上に指示するは困難な事業である。

すべて斯くの如く色々の方面から之を叩いて見ることに依て、内地米と外國米との商品としての地位、その相互關係等を窺ひ知るを得たから、以下内地米と外國米とを別々に見て、その各々の價格に對する關稅の影響を探究して見たいと思ふ。(以下次號)